

令和5年度 学内学術研究発表会 (教員)

日時

令和5年7月5日(水) 15:10～18:10

15:10 開会挨拶 高橋 秀裕 学長
15:20～ 研究発表

事前申込
不要!

会場

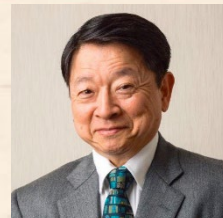
764・765・766教室



オープニング発表 15:20～15:50 764教室

発表者 片山 善博 (公共政策学科 特任教授)

発表テーマ **教育委員会が自主性を取り戻し、
本来の機能を回復するための課題**



発表概要

いじめ、不登校、教師の多忙化など義務教育の現場では解決すべき課題が山積している。近年は教師の成り手不足の傾向もみられるようになった。こうした深刻な課題を解決する上で主たる役割と責任を持っているのは地方の教育委員会であるが、総じて見るべき成果を上げていない。

かねて教育委員会には主体性、自主性、さらには責任意識が不足しているとの指摘がなされ、それを改善すべく2015年に地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正法が施行されたものの、その後も事態は一向に進展していない。

小中学校の教育現場の深刻な課題は一日も早く解決されなければならない、それには学校経営に責任を持つ教育委員会の機能回復が不可欠である。それをどうやって実現させるか。現在の教育委員会の運営の実態を踏まえ、教育分野における国と地方の関係、教育委員会の権限、教育行政を支える地方財政制度、教育委員会を構成する教育長及び教育委員の選任過程、それに際して決定的な責任を有する地方議会のあり方など、地方自治の分野をも視野に入れつつ課題解決の方策を考究する。

15:55

発表者 **天野 浩史** (地域創生学科 助教)

16:25

発表テーマ **大学生の挑戦を支える言葉・意味・物語の可能性**
— みんなのチャレンジ基地ICLa (イクラ) のアクションリサーチから



発表概要

本発表では、大学生がどのように挑戦をはじめ、それを育てているのかという点に着目し、筆者が運営に関わる「みんなのチャレンジ基地ICLa (イクラ)」におけるアクションリサーチについて報告する(以下、ICLa)。

ICLaは、静岡大学、アイザワ証券株式会社、静岡鉄道株式会社、NPO法人ESUNEの4者の連携によって静岡市駿河区小鹿に開設されたコワーキングスペースである。「やってみよう!があふれる静岡をつくる」ことを目的とし、大学生を中心とした若者の新しい挑戦・一歩を踏み出す支援に取り組んでいる。

報告では、大学生が発起人となったプロジェクトの生成と発展過程の分析から浮き上がった場の文化、挑戦を支える、もしくは阻害する存在について考察し、どのような支援が考えられるかという可能性について示す。

16:30

発表者 **長谷川 隼人** (総合学修支援機構DAC 講師)

17:00

発表テーマ **地域を対象とするプロジェクト型学習の授業設計**
— 社会の探究を通じた学びと成長



発表概要

総合学修支援機構DACは、教育と学修支援を融合したチュートリアル教育と様々な資質・能力の育成を目指す統合型教養教育を導入している。報告では、これらを活かした「地域」を対象とするプロジェクト型学習をベースとする授業設計を紹介する。本科目は、プロジェクト学習を通して、様々な資質・能力を身につけながら学生の主体的な意識を育むことを目指している。発表では、授業設計や評価方法とともに、リフレクションやアンケート調査などを分析して、実際に学生たちに見られた変化を中心に学修成果を提示する。

17:05

発表者 **仲俣 暁生** (表現文化学科 教授)

17:35

発表テーマ **雑誌編集における「弱い編集」について (仮題)**



発表概要

日本の近代出版史における雑誌編集の要諦は、編集責任者であり、多くの場合主筆でもある、いわゆる「名編集者」にあった。たとえば大正期の「中央公論」における滝田禎陰、「文藝春秋」における菊池寛などが、その代表例といえる。雑誌の方向性を定め、その方針にそって言論活動を行うこうした編集者のあり方を、「強い編集」と呼ぶことにすると、むしろ戦後の出版編集史は「強い編集」から「弱い編集」へと、編集のあり方が変化していく時代としてとらえることができる。

「弱い編集」とは、たんに編集を行わない、ということではない。中央集権的・トップダウン的な編集者の判断を留保し、読者共同体という、より緩やかな「場」のなかに編集の可能性をみる姿勢であり、それは初期の「POPEYE」(平凡出版)、「JJ」(光文社)、「本の雑誌」(本の雑誌社)などに見られる。そしてこの「弱い編集」はネット時代のSNSなどにも見られる特徴である。

いま産業としてはほとんど命脈を絶たれつつある「雑誌」における編集のあり方を、「強い編集」「弱い編集」という観点から整理し、インターネットとグローバル化の時代における「雑誌」や「編集」の価値と再生の手がかりについて考える。

17:40

発表者 **影山 裕樹** (表現文化学科 講師)

18:10

発表テーマ **全国に広がるローカルメディアと地域の編集**



発表概要

インターネットの普及によって旧来型のマスメディアの影響力が落ち、その代わりにSNSなど相互交流型のメディアが増加している。そんななか、古くから各地で発行されてきたローカルメディアに注目が集まっている。

ローカルメディアとは、マスメディアと異なり、情報が一方通行に流れるのではなく、発行者と読者の間で情報が相互に活発に交換されるツールとなっている。これは、現代のSNSと非常に似た機能を持っている。

そんな各地のユニークなローカルメディアを紹介しつつ、マスメディアの衰退によりメディア企業を辞め地方へUターンする編集者などのクリエイティブ職の人材の活躍について紹介する。もともとメディア業の少ない地方において、こうした人材は貴重であり、よそ者性を発揮しながら地域の価値を掘り起こし、地域ブランディングを担う人材として注目を集めている。こうした人材の持つスキルを地域編集ととらえ、分析していく。

15:55

発表者 **田附 あやか** (臨床心理学科 准教授)

16:25

発表テーマ **児童虐待が生じた家族への心理的支援に関する考察**
— 児童養護施設入所児とその家族への支援



発表概要

現在、児童養護施設入所児童の59.5%は虐待を受けた経験をもつに至っている(厚生労働省平成30年度児童養護施設入所児童等調査結果より)。かつて「孤児院」とされていた時代とは異なり、児童虐待が生じたということは逆説的ではあるが不適切ながら養育を行う保護者が存在するということである。同調査によると、現在は、児童養護施設入所児童のうち、約93%が「両親またはひとり親」がおり、親との交流の無いものは約2割にとどまっているとされる。つまり、不適切あるいは不十分とされる養育を行った親と入所児童が交流を持つ機会は日常的に存在するのが現状である。家族交流を行う際に、家族への手厚いサポートなしには、子どもがさらなるリスクを重ねる結果になりかねないことは明らかである。さらに保護者の多数が自身も逆境的環境で育っていると指摘されており、保護者自身の心理的ケアなしには家族における養育機能の回復はおぼつかないとされる。

このような現状を受け、これまで発表者は、児童養護施設における心理的支援の家族支援に寄与することを目的として、現場での家族支援実践を通して、①家族支援の意義の理論的整理、②実践において必要な枠組みとして、家族に児童虐待が生じる背景に関する記述的分類の提示、を行ってきた。また、最近子どもを分離保護せず、家族内で養育する(家族維持)のために必要な視点の提示を整理している。

16:30

発表者 **池田 暁史** (臨床心理学科 教授)

17:00

発表テーマ **スペインかぜ時代のフロイト**



発表概要

新型コロナウイルス感染症(Covid-19)は、2020年1月に国内初の感染者が確認されて以降、3年以上にわたって猛威を振るった。2023年5月に国内のさまざまな規制が緩和されたとはいえ、感染者数自体はいまも一定以上の水準が続いている。

心理臨床の世界もCovid-19の影響を大きく受けた。プライバシーが保護された密室での対人交流を基本構造とする心理療法は、外出制限による通所の不自由、密閉回避によるプライバシー保護の困難など、さまざまな困難に直面することになった(これらはオンライン面接という新たな方法を飛躍的に発展させることにもつながったが、本発表ではその功罪については扱わない)。これらの諸問題は現在ではだいぶ正常化しているとはいえ、たとえばどのタイミングでマスクを外して面接を行うのかといった問題をいまだに残している。

私が専門とする精神分析が疫禍に襲われたのはこれが初めてではない。精神分析の祖Freud,Sの時代にもスペインかぜのパンデミック(1918-1920)があった。本発表はFreudに関連する一次資料を基にスペインかぜの時代のFreudがどのように生き、どのような臨床を行ったかを探求するものである。

17:05

発表者 **門本 泉** (臨床心理学科 教授)

17:35

発表テーマ **受刑者の再犯予測**
— アセスメントを可能にする臨床的・統計学的アプローチ



発表概要

刑事施設における受刑者への心理教育的な処遇の重要性は論を待たない。現代では、再犯防止のための効果的な処遇には、RNR原則(Risk-Need-Responsivity Principle; Bonta & Andrews)に基づいた実施が必要だとされているが、ここで重要なのは、対象者(刑事施設にいる受刑者)の再犯のリスク査定である。

受刑者に利用できるリスク・アセスメント・ツールの開発に当たって、統計学的手法に加え、臨床的・実務的知がどのように役立てられるかについて発表する。

17:40

発表者 **伊藤 宏之** (歴史学科 准教授)

18:10

発表テーマ **武蔵型板碑にみる金書と墨書**



発表概要

多くの武蔵型板碑には、銘文が刻まれている。しかし、時代や地域によって、銘文が刻まれていない事例も散見できる。こうした銘文彫刻のみられない板碑については、他の方法による銘記が想定されてきた。近年、調査で判明した金書と墨書の事例を紹介し、武蔵型板碑における銘文表記の多様性について明らかにする。

766教室

15:55

発表者 **大沼 みずほ** (公共政策学科 准教授)

16:25

発表テーマ **これからの少子化対策について**



発表概要

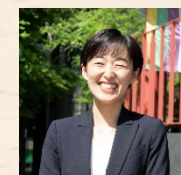
岸田政権が次元の異なる少子化対策を発表し、政府の重点施策として注目されているものの、その財源を巡る議論やこれまでの少子化対策と何がどう違うのかは明瞭ではない。また、これまでの少子化対策とはどんなもので、今後必要な施策はどのようなものか。日本の直面する最大の課題となっている少子化問題について、発表を行う。

16:30

発表者 **中村 夏葉** (仏教学科 講師)

17:00

発表テーマ **空海請来系両部曼荼羅の図像解釈研究**



発表概要

弘法大師空海が請来した両部曼荼羅すなわち現図曼荼羅の成立に関する問題について、図像解釈学の観点から研究を行っている。空海が『御請来目録』において述べているように、絵図としての曼荼羅には、深玄なる密教の世界を未だ悟らざる者に対して開示するという役割がある。言語ではなく図像による視覚イメージから直観的に真如へ導かんとする曼荼羅において、図像の取舍選択とその表現は密教の本質に関わる重要な問題を含んでいる。金剛界と胎蔵の両部曼荼羅は、それぞれ『金剛頂経』と『大日経』を典拠とする。インド以来の伝統を受け継ぐチベットでは、両経典の内容に比較的忠実に描いたマンダラが継承されている。一方、空海が唐より請来した両部曼荼羅には、両経だけでは説明がつかない図像表現上の特徴が非常に多くみられる。それは本来別々の成立である金剛界と胎蔵が一具となるだけでなく、尊像数の増加、尊像の細部図像の変更、尊像の配置構成、また両部全体の画面構成にいたるまで多岐にわたっている。この図様の変化は何を意味するのか、両部曼荼羅はその表現によって曼荼羅をどのようなイメージとして真如の世界を伝えようとしているのか、両部曼荼羅が内包する曼荼羅観を明らかにすることを大きなテーマとして研究を進めている。

17:05

発表者 **粕谷 隆宣** (仏教学科 准教授)

17:35

発表テーマ **明恵における加持の概念**



発表概要

刑明恵房高弁(1173-1232)は鎌倉時代を代表する高僧である。明恵は、一般に華嚴宗僧として認識されることが多いが、青年期から、真言宗寺院である仁和寺で修学を重ねた密教僧であった。

近年、明恵の密教思想の研究は精力的に行われてはいる。しかしながら、その密教修法の内実はいまだ不明な点が多い。真言密教で修法の核となる「加持」は重要な理念であるが、明恵と加持との関係が解明されているとはいえない。すなわち、真言密教(弘法大師空海)の加持の理念が、そのまま明恵に流入されたのか。それとも、真言密教のみならず、明恵の解釈が加持に反映され、独自の思想を展開させているのか。という点が問題になってくる。

そこで、今回は明恵における加持の概念を照射し、その思想の特徴と祈祷の様相を調査していく。これをもって、明恵の密教思想の全体像をつかむ切り口としていきたい。

連携企画のご案内

附属図書館(8号館内)にて、発表者の著書、共著、及び研究活動関連書籍を展示する「学内学術研究発表会連携展示」を開催致します。お気軽にお立ち寄りください。

■日程 令和5年7月1日(土)から7月14日(金)

■会場 8号館2階・図書館新刊書架(2階カウンター隣)

■主催 学術委員会

■問合せ 教務部教育研究支援課(研究支援・研究所運営担当) 1号館1階